2001年度コミュニティ福祉学部研究センター研究会報告　2001年12月14日

# 宗教人間学の視座 ―『ギルガメシュ叙事詩』における死生観

## Death and Life in the Epic of Gilgamesh

月本　昭男　Akio Tsukimoto

本日の学部研究会は、「宗教人間学」担当の佐藤研教授と私の研究発表となっております。中心は佐藤研教授の発表です。私はその「前座」にすぎません。古代メソポタミアの文学作品『ギルガメシュ叙事詩』をとりあげ、その死生観について簡単なご報告をさせていただきます。

### １．私の研究

学生時代、私はキリスト教を研究してみたいと思い、新約聖書の勉強に取り組みはじめました。しかし、新約聖書を理解するには、まず旧約聖書を知らなければならぬ、と忠告してくださった先生の言葉にしたがい、大学院時代、宗教史学を専攻しまして、旧約聖書学を選びました。ところが、旧約聖書を理解するためには、さらに旧約聖書の歴史的・文化史的背景となる古代オリエントについても知らなければならぬ、との思いから、留学時代には古代メソポタミアの楔形文書にまで足を踏み入れることになりました。楔形文書の世界も踏み込んでみますと、意外に面白いのです。それ以来，古代オリエント学と旧約聖書学という「二足の草鞋」を履いて参りました。本学の授業では、カリキュラム上、宗教学、聖書の思想、旧約聖書などを講義しておりまして、本日ご紹介する『ギルガメシュ叙事詩』など、古代メソポタミアの文学作品は、講義などで取り上げる機会はほとんどありません。

### ２．「寡婦と孤児」 ― 古代の福祉 ―

ところで、本日はコミュニティ福祉学部の研究会ですから、本来ならば、旧約聖書や古代メソポタミアにおいて、社会的弱者がどのように保護されていたのかという主題で発題できればよかったのですが、充分な準備ができていません。そこで，『ギルガメシュ叙事詩』の紹介にさきだち、古代西アジアにおける「孤児と寡婦」の権利擁護の伝統に簡単に触れることにいたします。

古代メソポタミアでは紀元前2500年頃のシュメルの都市国家の王であったウルカギナ（ウルイニムギナ）が、その社会改革において、「権力ある者は寡婦や孤児を圧迫しては成らない」と定めて以来、「寡婦と孤児」に代表される社会的弱者の保護がメソポタミアの支配者の義務として、連綿として継承されていました。有名なハムラビ法典（前1750年頃）におきましても、この王は法典のあとがきで、自らを寡婦と孤児を守る者と誇っています。

こうした伝統は旧約聖書にも引き継がれました。旧約聖書では、しかも、古代西アジア以上に、「寡婦と孤児」の権利擁護がつよくうちだされることになります。それは、エジプトの奴隷からイスラエルの先祖を解放したと信じられた神が弱者を守ることを命じているからです。旧約聖書の律法には、「寡婦と孤児」さらには「寄留の外国人」や「貧しい者」の保護の定めが繰り返されます。

寡婦や孤児は、すべてこれを苦しめてはならない。（出エジプト記22：21）

寄留者や孤児の権利をゆがめてはならない。寡婦の着物を質にとってはならない。

（申命記24：17）

耕地をもたない「寡婦と孤児」「寄留の外国人」「貧しい者」には、収穫の季節には、「落ち穂拾い」の権利も認められました（申命記24：19-22，他）。古代イスラエルにおいては、社会的弱者の権利擁護は支配者のみならず、民全体に課せられた神の定めとして、宗教的に義務づけられていたのです。

しかし、現実はその通りにゆきません。［寡婦と孤児］は格好の抑圧対象となっていました。こうした現状を座視できなかったのが預言者です。彼らはそうした現状を厳しく批判します。例えばイザヤは、

搾取する者を懲らしめ、

孤児の権利を守り、

寡婦の訴えを弁護せよ、

と同胞に迫り（イザヤ書1：17）、

支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、

皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。

孤児の権利は守られず、

寡婦の訴えは取り上げられない、

との糾弾の声をあげています（同1：23）。この他、旧約聖書における「寡婦」や「孤児」への言及は、数えてみますと、60箇所をくだりません。「寡婦と孤児」に象徴される社会的弱者の権利擁護の思想は、確かに、旧約聖書の社会思想の重要な一面です。キリスト教の福祉思想のひとつの源流がここにあります。この点にかんする詳しい考察は、しかし、後日を期したいと思います。

## ３．『ギルガメシュ叙事詩』における「死と生」

「人間が成し遂げることはすべて風に過ぎない」。東洋思想を想わせるこの言葉は、楔形文字で粘土板に記された古代メソポタミアの文学『ギルガメシュ叙事詩』の一節です。人類は、仏教やキリスト教が成立するはるか以前から、人間が生きるとはどういうことか、と問いかけていました。はるか昔の『ギルガメシュ叙事詩』にも、その随所に、人生に関する様々な問題が

具体的なかたちでちりばめられ、問い返されています。

ギルガメシュという名の「英雄」の歩みを描くこの叙事詩は、まずは紀元前1800年頃、それまでのシュメル語の諸伝承をもとにアッカド語（アッシリア・バビロニアの言語）でまとめられた作品です。紀元前1200年頃に、その標準版ができあがりました。その後、ほぼ1000年の長きにわたって書き継がれ、読み継がれました。その本文は完全なかたちで今日に伝えられているわけではありませんけれども、前世紀以来、古代西アジアの遺跡から出土した数々の叙事詩断片が幾多の研究者によって解読され、研究されて、ほぼ物語の全体が再構成されるようになりました。５年ほど前、そうした地道な研究をふまえた叙事詩の拙訳が出版されました（『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店，一九九六年）。以下、それに拠りながらながら、古代メソポタミアの人々が抱いた人生観の一端を紹介させていただきます。

古代メソポタミアの都市国家ウルクの王であり、暴君であったギルガメシュは、当初、英雄的な人生観を抱いておりました。冒頭に掲げた言葉は、そのギルガメシュの言葉です。人間は神のように永遠に生きることはできない。その人生で成し遂げることは、結局、吹いては過ぎ去る風のようなものだ。そう考える彼は、だからこそ、死をものともせず、勇猛果敢な闘いの人生を送るべきだ、と結論づけておりました。もし仮に、闘いに敗れたとしても、勇ましく闘った、と後々まで伝えられれば、それでよいではないか、ともいいます。そして、盟友エンキドゥと共に香柏の森の怪物フンババ退治の遠征に出て行きます。

ところが、ギルガメシュはこのような英雄的人生観を貫徹できません。物語の詳しい経過は省略しますが、共にフンババを退治し、「天牛」をしとめた盟友エンキドゥが、神々の決定により、死にいたる病に伏し、衰弱して息絶えます。この盟友の死に直面して、ギルガメシュの英雄的信条はもろくも瓦解してしまうのです。英雄も友の死の悲しみには打ち勝てなかった。また、彼を襲う死の恐怖は、英雄的信条をも衝き崩さずにはおかなかったのです。『叙事詩』はその辺の消息を次のように描写しています。

ギルガメシュは彼の友エンキドゥのため
いたく泣いて、荒野をさまよった。
「わたしも死ぬのか。（中略）
悲嘆がわが胸に突き刺さった。
わたしは死を怖れ、荒野をさまよう。」

こうしてギルガメシュは、死をこえる生命を求めて、旅に出ます。死を怖れるこの英雄は、死に脅かされることのない永遠の生命を希わずにはいられなかったのです。旅の目当ては、太古の昔、地上を覆った大洪水を生き延び、不死の生命を得て神々に列せられた、と伝えられる伝説的な人物ウトナピシュティム（旧約聖書のノア）に会うことでした。彼に会って、彼から人間の「死と生の秘密」を聞き出そうとしたのです。その胸に悲嘆を抱き、遠い道のりを旅するギルガメシュの姿は、もはや英雄のそれではありません。

旅の途中、シドゥリという名の女神がギルガメシュに忠告します。

ギルガメシュよ、お前はどこにさまよい行くのか。
お前が探し求める生命をお前は見出せまい。
神々は人間を造ったとき、人間に死をあてがい、
生命は彼ら自身の手におさめてしまったのだ。
ギルガメシュよ、自分の腹を満たすがよい。
昼夜、あなた自身を喜ばせよ。
日毎、喜びの宴を繰り広げよ。
昼夜、踊って楽しむがよい。
あなたの衣をきよく保つがよい。
あなたの髪を洗い、水を浴びよ。
あなたの手をとる子供に眼をかけよ。
あなたの膝で妻が歓ぶようにするがよい。
これが［人間のなすべき］業なのだ。

人間は必ずいつかは死ぬ。それが人間の定めである。そうした人間の有限性を見据えた上で、その限りある人生をそのままに享受し、限りある日々の生活を楽しく暮らすこと、それこそが人間本来の生き方だ、と女神は教えます。それは現世享楽主義とでも呼んでもよいような人生観です。しかし、女神のこのような忠告を受け入れて、永生を断念するには、盟友エンキドゥの死を悼むギルガメシュの悲しみはあまりに深く、彼を襲う死の恐怖はあまりに大きかったのです。シドゥリの忠告も彼を永生希求の旅を諦めさせることはできませんでした。

叙事詩の標準版においては、なぜか、享楽的な人生観を語るこの女神シドゥリの言葉は削除されてしまいました。それに代わって,「死と生の秘密」を知るウトナピシュティムに次のように語らせています。

誰も死を見ることはできない。
誰も死の顔を見ることはできない。
誰も死の声を聞くことはできない。
死は怒りのなかで人間をへし折るのだ。

ここには、無情な暴力性とでも呼べる死の脅威と死を前にした人間の無力さとが語られています。病気や事故や戦争とつねに背中合わせに生きていた古代西アジアの人々は、つねに、不慮の死をもたらす悪しき諸力に脅かされていました。そうした諸力は悪鬼や悪霊として恐れられていたのです。永遠に生き得ない人間には、せめて、神々に仕え、神々を祀ることによって、そうした諸力の攻撃を遠ざける以外に幸いはない。このようにウトナピシュティムはギルガメシュに諭します。女神シドゥリの忠告に説得されることのなかったギルガメシュです。このようなウトナピシュティムの言葉に得心するはずもありませんでした。

ウトナピシュティムは、消耗と失意のうちに帰郷しようとする英雄に同情を寄せた妻の口添えもあって、ついに人間に不死を約束する草のありかをギルガメシュに教えます。それは海の底にある「老いたる者が若返る」という名の草でした。こうして不死の薬草を手に入れたギルガメシュは、勇躍歓喜して帰途につきますが、その途中、冷たい泉で休息をとっている間に、その草は消えてしまった。蛇が持ち去ってしまったのです。そこには、脱皮した蛇の抜け殻が残るばかりであった、といいます。こうして、永生希求の旅はあっけない幕切れとなり、物語は終わります。帰郷したギルガメシュが、その後、いかなる人生を送ることになったのか、『叙事詩』は語りません。それによって『叙事詩』は、あたかも、「あなたはどのような生き方を選びとりますか」と読者に問いかけているようにもみえます。

前一千年紀前半、当時の西アジア全体の覇権を手中にしたアッシリア帝国においても、『ギルガメシュ叙事詩』の人気は衰えませんでした。現在まで知られている『叙事詩』の粘土板文書は、じつは、そのアッシリアの主都ニネヴェの図書館から発見されたものが最も多いのです。

アッシリア人は、しかし、前述したような『叙事詩』の結末のつけかたに納得がゆかなかったらしくあります。そこで、巻末に、それまでの物語とは話の筋がつながらない逸話を補遺のかたちで付け加えました。死後の世界をめぐる問答です。ギルガメシュのために冥界に赴き、冥界に囚われてしまったエンキドゥは、冥界の神が開けた穴から死霊の姿でギルガメシュの前に現れます。そこでギルガメシュは、死んで冥界に下った個々の人間の運命について、エンキドゥに問い、エンキドゥはその問いにひとつひとつ答えてゆくというわけです。ギルガメシュの問いは次のようにはじまります。

言ってくれ、友よ、言ってくれ、友よ。
あなたが見た冥界の掟を言ってくれ。

最後は次のような問答でおわっています。

その霊が供養を受けない者を見たか。
見ました。
彼は器からこそげた物や通りに投げ捨てられたパンのかけらを食べていました。

古代メソポタミアにおいて、人間は死んで冥界に下る、とひろく信じられていました。とすれば、人間はそこで、いったい、どのような「死後の生」を送るのか。このような関心のもとに、冥界に下った死者をめぐってギルガメシュとエンキドゥの間で問答が交わされます。そして、死者供養を受けられない者は冥界で苦しまねばならないが、充全な死者供養を受ける死者はやすらぎを得る、という伝統的な結論がそこで確認されてゆくのです。後の宗教にしばしばみられるような、生前の行為によって冥界における死者の運命が左右される、という倫理主義的発想は古代メソポタミアには発達しませんでした。死者の赴く冥界が極楽と地獄とに分かれるのは、後のことです。ともあれ、この問答には、死を免れることができないならば、せめても、やすらかな死後でありたい、と希った古代西アジアの人々の心情が反映しています。しか

し、死すべき人間はその限りある人生をどのように生きたらよいのか、というそれまでの『叙事詩』の問いかけは、そこでは、後退してしまっています。

以上、人類最古の叙事詩といわれる『ギルガメシュ叙事詩』を「死生観」という視点から紹介してみました。そこには、死をものともしない勇猛果敢な英雄的人生観が、それをも突き抜けて人を襲う死への怖れが、死をこえる永生への希求が、永生をあきらめた現世享楽的人生観が、そして暴力的死の回避の勧めが、素朴に、それゆえ印象深く、語り出されております。

いつかは必ずやってくる死を前にして人はいかに生きるのか。それは遙か古代の人々の問いでもありました。

ご清聴ありがとうございました。

## ４．質疑応答

**坂田**：『ギルガメシュ叙事詩』のような長い物語は、粘土板にどのように記されえたのでしょうか。

**月本**：書簡や売買契約書などは、比較的小さな粘土板のひとつにまとめられますが、叙事詩のような長い作品は比較的大きな粘土板の表裏に記しました。『ギルガメシュ叙事詩』の場合、標準版では12の粘土板が用いられました。各粘土板は６つの欄に分けられ、各欄に50～60行が記されますので、この『叙事詩』は全体では4000行ほどの作品になります。文字は、生乾きの状態の粘土板に角度のある葦の棒先で押し書きしました。大切な文書はこれを焼いて保存しました。

**濁川**：楔形文字の解読方法について説明してください。

**月本**：一言では説明しにくいのですが、楔形文字は音標文字としても表意文字としても用いられ、一つの文字がそれぞれ複数の音価と意味を表わすことができましたから、文脈によって最適な意味を考えると同時に、音価として文法に沿っているかどうかを確認しながら、読み進めます。頻繁に用いられる文字は数にして150程度です。

**坂田**：ギルガメシュは実在の人物ですか。

**月本**：実在したかどうか、確実にはわかりません。ただし,『ギルガメシュ叙事詩』以外にも、ギルガメシュをめぐる物語がいくつも残っていまして、そこに実在した王が登場することや、古い王名表などにもギルガメシュの名がみえますので、ギルガメシュが実在した可能性は高いと思います。時代は紀元前2550年頃でしょうか。彼が王であったという都市国家ウルクの遺跡は今日のイラクに残ります。発掘が進められていますので、あるいは、いずれ直接的な資料が発見されるかも知れません。